



### 桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

8

桜井の絵については、まだまだ語り尽くせない。ほんのわずか、表現の一端をのぞき見たに過ぎない。個々の作品について、さらに具体的な語り合いが、これからも豊かな時間をかけて行われるであろう。

そのためにも、私は、桜井の絵を語ることに倦まない。たとえば、桜井は、いわゆる日本の芸大流の描写訓練を受けていない。そのために彼の表現が素朴であるかのような錯覚をなしとしない。この錯覚がすでに危険な無理解の原因なのだ。私は誤解をおそれずにデッサンについての考えを述べよう。デッサンとは、画家が自らの表現にもっとも必要とする表現方法を獲得するための訓練である。すなわち、デッサンに定型はない。ある目に見えぬ権威の与えた表現公式に追従することをもってデッサンというなら、それは絵画以前のことである。

桜井の絵は、彼が画家であるために宿命的に必要とする表現技術のあくなき訓練と追究のすえに生まれ出ている。これも蛇足と承知で、世にいう「絵」への狭苦しい誤解から解き放つために述べておきたい。

桜井が、サンフランシスコからパリ郊外へアトリエを移すとき、満々たる自信を秘めていたであろうことは想像に余りある。世界中から無数の画家が集中しているパリの国際的視野の中で、彼が獲得した絵画思想と絵画技術が通用するかどうか、誰の目にもはっきりとわかるように示してみようという意図があったに違いない。その意味で、私は、国際市場価値を獲得し始めている事実を、少しばかり付け加えておこう。